

短大生（大学生）の文章力に関する問題点を考える

—— 短大生の経年変化ならびに四大生とも比較して ——

佐藤 達全¹⁾

Decline in Writing Skills of Junior College Students (University Students):

Changes in Writing Skills of Junior College Students Over Time and a Comparison
with Those of Four-Year University Students

Tatsuzen Sato

Abstract

It was around 30 years ago when the author began to feel that the writing of junior college students (in the early childhood education department) was strange. This was triggered by the fact that the writing across papers and practical training journals, submitted by students as class assignments, was largely inappropriate. The author submitted a report titled *Hoikuka gakusei no bunsho hyogenryoku ni tsuite* (Writing Ability of Students at the Department of Early Childhood Education of Ikuei Junior College) to *The Bulletin of Ikuei Junior College*, No.19. In the report, submitted in September 2001, the author took up strange expressions that commonly appeared in students' writing and analyzed them. Twenty years have passed since this report.

During this time, the author contributed to *The Bulletin of Ikuei Junior College* on eight occasions and made six presentations at the conferences of Zenkoku Hoikushi Yousei Kyogikai (The Japan Association of Training Schools for Nursery Teachers) to report on the decline in students' writing skills and point out its effect on the quality of nursery teachers. In addition, the author made presentations on measures to deal with this decline in writing skills. When this study was first published, it did not receive much attention. However, later, the author's research began to be mentioned and cited many times, confirming the seriousness of this issue.

This study is an attempt to examine how the writing skills of junior college students have changed over the last twenty years. It also compares their writing skills with those of students at a four-year university since the author teaches the "Japanese I" class for first-year students in the newly established Faculty of Education (at a four-year university).

Key words: writing skills and the qualities of nursery teachers, "writing is a person," basic academic skills, motivation to learn, the age of university entrance for all people

キーワード: 文章力と保育者の資質, 文は人なり, 基礎学力, 学習意欲, 大学全入時代

1) 育英短期大学保育学科

1. はじめに

筆者が短大生（保育科）の文章が「おかしい」と感じるようになったのは、今からおよそ30年ほどまえのことである。そのきっかけになったのは、授業のレポートや実習日誌に書かれている文章であった。そして、学生の文章に頻繁に登場する〈まちがい〉を取り上げた「保育科学生の文章表現力について」と題する報告を『育英短期大学研究紀要』第19号に投稿したのが2001年の9月であったから、それから20年が経過したことになる。^(註1)

その間に、筆者は『育英短期大学研究紀要』に8回投稿する一方で、全国保育士養成協議会の研究大会で7回の発表を行って、学生の文章力低下の実態を報告するとともに、文章力低下が保育者の資質に及ぼす問題等を指摘し、さらに文章力低下防止への取り組み等についての発表を行ってきた。筆者がこのような研究を発表した当初はあまり関心を持たれなかったが、その後は筆者の論文の紹介や引用が増え、この問題の深刻さが裏づけられている。

本小論はその後の短大生の文章力がどのように変わってきたのか、さらに筆者が新設された教育学部（四年制・1学年100名）1年生の授業「日本語Ⅰ」を担当していることから、四大生との比較も試みたものである。残念なことに、大学生（短大生）の学力低下は、かなり前から指摘されるようになった。前掲拙論の概要で筆者は次のように指摘した。

大学生の「文章力が低下した」と言われて久しい。レポートの文章に話しことばが紛れこんでいたり、「である」調と「です・ます」調が混在していたりするのはよいほうで、意味に関係なく同じ発音の漢字が使われることも少なくない。ひどいものになると、「て・に・を・は」さえ正確に書けない文章も見受けられる。当の本人はそんなことには一向に無頓着で、間違いを指摘すると、

なぜそんな細かなことまで言われなくてはならないのかという表情である。

そしてそのあとに、具体的な書き方の問題として次のような13点を提示した。

- ① 誤字や当て字が多いこと
- ② 主語と述語の関係が正しく対応しておらず、文章の構成がおかしいこと。
- ③ 助詞の使い方がおかしく、正しい日本語の文章になっていないこと。
- ④ 話し言葉のまま書かれていること。
- ⑤ 「見れる」「食べれる」はもとよりのこと、「違く」「やっぱし」など、〈最新のはやり言葉〉のような表現がしばしば登場すること。
- ⑥ 説明文を書く場合、主語と述語が正しく対応していない場合が少なくないこと。
- ⑦ 語彙が乏しいためであろうか、同じ形容詞や副詞を何度も繰り返し使っていること。
- ⑧ 代名詞を用いて表現することがほとんどないので、ものや人の名前などを何度も繰り返し書いていること。
- ⑨ 文章が長いと、「ので」や「が」といった助詞を用いてだらだらと続ける場合が多いこと。そのため、一つの文章が200字～300字も続いている文章を時々見かけること。
- ⑩ 推量表現（ではないでしょうか）がほとんどみられないこと。これは、与えられることに慣れてしまった結果、想像力が乏しくなったからであろうか。
- ⑪ 800字程度の文章を書くときに、一つも段落を区切ることがない学生も見られること。
- ⑫ 文末の表現がすべて「思います」や「です」などワンパターンであること。
- ⑬ 文章表現力ではないが、テキストがすらすら読めない学生も少なくないこと。常用漢

字すら完全に覚えていないことと、アクセントがおかしいために他の意味に受けとめられかねない読み方をする学生が目立つこと。

このような指摘をした上で、さらに学生の文章の問題点を分類した。それは

- ① 敬語に関する問題
- ② 同音異義語や誤字に関する問題
- ③ 基本的な言葉・表現に関する問題
- ④ 「たり」(並列)の使い方に関する問題
- ⑤ 主語と述語の繋がりに関する問題
- ⑥ 「です・である」(文体)に関する問題
- ⑦ 説明文における主語と述語に関する問題
- ⑧ 「て・に・を・は」に関する問題
- ⑨ 文章の構成に関する問題
- ⑩ 話しことばと書き言葉に関する問題
- ⑪ 文末に同じ語をくりかえす問題

などで、それぞれの項目に学生が書いた「おかしな文章」を例示したのである。

もちろん、間違った書き方を指摘するだけでは書き方の改善にはつながらないため、筆者はそれから学生との「根気比べ」を始めて、少しでも学生の文章力を向上させるためのトレーニング(国語表現法の授業で毎週作文の課題を書くこと)を試みてきた。

その結果、「国語はすべての基本」と言われてきたことの理由が確認された。それは、文章力のトレーニングをすることが、学生の人間性や保育者としての資質の向上につながっていたことである。そして、これまでの根比べの経過を育英短期大学研究紀要や全国保育養成協議会の研究大会等で発表した。

【育英短期大学研究紀要】

「文章表現力から見た保育科学生の問題点」(第23号 2005年)

この小論では、短大生の文章力の実態と問題点

を指摘した上で、そのことが日常の保育活動にどのように影響するかを考察し、授業での対応を紹介した。

「保育者をめざす学生の基礎学力と生活習慣—文章表現に見える問題点を中心に—」(第25号 2008年)

この小論では、学生の文章力の問題を紹介してその原因を考察するとともに、文章力向上に向けた国語表現法の授業での対応とその結果について生活習慣と関連づけて考察を行った。

「短気大学における保育士養成について—基礎学力と学習意欲を中心に—」(第27号 2010年)

この小論では、短期大学における保育者養成の歴史を振り返りながら、保育者養成校の四年制大学化が進んでいる現状と短大生の基礎学力と文章力の関係や生活習慣について考察を行った。

「短期大学における保育士養成について(2)—基礎学力や学習意欲以前の問題を中心に—」(第28号 2011年)

この小論では、前号を承けて少子化に伴う「大学全入時代」といわれる状況の中で短大生の文章力低下の背景にある学習意欲の低下とそれ以前の日常生活について考察を行った。

「保育科学生に対する作文指導の目的とその結果について—「日本語の表現法」と「保育者論」の授業を通して—」(第30号 2013年)

この小論では、保育者になりたいという目的意識を持ちながら、そのために必要な知識や技能の修得にはほとんど関心を示さない短大生の実態を紹介しながら、その背景にある現代社会の問題にも言及するとともに、文章力向上に向けた授業での取り組みと現職保育者の文章力低下の実態も紹介した。

「保育科学生の文章表現力低下の原因と対応—日本語表現法の課題文と実習日誌を中心にして—」(第31号 2014年)

この小論では、実習日誌に書かれた文章の問題

点を取り上げながら、保育現場からの指摘とあわせて学生の現状を分析するとともに、読書離れ・基礎学力の欠如・学習意欲の低下といった状況の中での対応について考察を行った。

「保育者をめざす学生の文章力を高めるための取り組みについて—保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの実習日誌を比較して考える—」(32号 2015年)

この小論では、1年生の2月に行った「保育実習Ⅰ」(観察実習)の実習日誌の文章に見られる「観察のしかた」「子どもや保育者を見る視点」「保育実習Ⅱ(責任実習)を視野に入れた観察のありかた」等の問題点を踏まえて「日本語表現法」の授業を行った結果、2年生の8月9日に行った「保育実習Ⅱ」の実習日誌の文章がどのように変化したかについて考察を行った。

「短大生の文章力低下と幼児期の保育(教育)について—「やる気」の形成と幼児期の主体的な遊びの意味を中心に—」(第36号 2019年)

この小論では、文章力の低下や学習意欲の低下には共通点があること、そしてその原因が幼児期の教育(保育)であることを指摘するとともに、「遊びを基本とした」幼児教育(保育)がその後の学習意欲(文章力向上も含めて)を左右することについて考察を行った。

【全国保育士養成協議会 研究大会】

「保育者をめざす学生の基礎学力について 文章表現に見える問題点とその対応」(第45回研究大会 2006年 広島市安田女子短期大学)

「保育科学生の文章表現に見える問題点 学習習慣と基本的な生活習慣について」(第46回研究大会 2007年 鹿児島市城山観光ホテル)

「保育者をめざす学生の想像力を高めるための試み 文章表現に見える問題を出発点にして」(第47回研究大会 2008年 函館市函館国際ホテル)

「文章表現力からみた保育士養成の問題点 短大

生の学習意欲と基礎学力を中心に」(第48回研究大会 2009年 仙台市東北福祉大学)

「保育者をめざす学生の生活と学習について 大学全入時代の問題と保育者の資質」(第49回研究大会 2010年 甲府市富士屋ホテル)

「短期大学における保育士養成と保育者論 学生の描く保育士像と求められる保育者の資質」(第50回研究大会 2011年 富山市富山県民会館)

「書くことと話すことから見た保育科学生の問題点と対応について 基礎学力の低下と生活体験不足の中での保育士養成」(第51回研究大会 2012年 京都文教大学・京都文教短期大学)

これらの発表を通して、文章力の向上を図ることの重要性とそれが保育士の資質向上に繋がることを指摘した。^(註2)

2. 文章力向上のトレーニングについて

筆者が文章の書き方の授業を担当するようになってから、30年あまりが経過した。すでに触れたように、そのころから大学生の学力が低下したことや文章が書けないといった指摘はされていたものの、多くの学生は「そこそこの文章」を書いていと記憶している。ところが、次第に首を傾げたくなることが多くなってきた。それを指摘したのが『育英短大紀要』第19号の拙論「保育科学生の文章表現力について」である。

時を同じくして、実習先の園長先生からも「日誌の文章に誤字が目立ちますね」「実習日誌を書くのにかなり長い時間がかかっているようです」「実習日誌を書くために睡眠時間がかなり短くなっているようです」といった指摘が寄せられるようになってきたので、「学生の文章に頻出する間違い文」や「正しい書き方のヒント」などの資料を配付して注意を促していた。ところが、そうした指摘をするだけではなかなか書き方の改善が

見られなくなってきたのである。そのために始めたのが、学生との「根比べ」のトレーニングであった。その方法については『育英短大研究紀要』第23号で次のように説明しておいた。

推量表現がほとんど見られないことや代名詞を使う学生が少ないことについては、授業中にくり返し指摘することで注意を促している。しかし、授業中に説明しただけでは「自分の問題」として認識することができず、いつまでも間違った表現を続ける学生が少なくないのである。

そこで、宿題として毎時間テーマを示し、次の時間までに400字の作文を書いてくるように指示した。提出された作文にすべて目を通し、問題部分を赤ペンでチェックして翌週に返却する。半期で15回ほどの作文提出になるが、これをくり返すことにより、学生は自分がどんな間違いをしているかに確実に気づくことができる。

ただし、原則的には間違いを指摘するだけに止め、訂正は学生に任せている。その理由は、教師が訂正してしまったのでは学生が何もしないからである。もちろん、訂正の仕方やなぜ間違っているかがわからない場合にはいつでも質問を受けることを伝えてある。そして、訂正の仕方については学期末までに数回、それまでの作文をまとめて再提出することで確認している。また、作文のテーマは、学生が社会の問題に目を向けたり、自分の内面や将来を見つめたりすることができるような内容にしている。

参考までに、ある年の15回の作文テーマを示すと、次のようである。

- 第1回 2年生の後期を迎えての決意
- 第2回 短大に入学して成長したこと
- 第3回 実習を体験して成長したこと
- 第4回 少子化について思うこと
- 第5回 社会人にとって敬語は必要か
- 第6回 男女平等について思うこと
- 第7回 私の弱点とその克服法
- 第8回 夫婦共働きについて思うこと
- 第9回 乳幼児の虐待について思うこと

- 第10回 子どもの貧困について思うこと
- 第11回 信頼される社会人に向けて努力していること
- 第12回 高齢化社会について思うこと
- 第13回 冬休み中に取り組みたい事と具体的な計画
- 第14回 日常生活で大切にしていること
- 第15回 添削指導を受けて思ったことと今後の課題

毎週の授業で学生が提出する作文をすべてチェックするには、かなりの時間が必要である。しかし、この方法を実行する前の「文章の正しい書き方を説明する方式」では学生の文章の書き方にあまり変化が見られなかったことを筆者は経験している。それは「自分の問題として認識することができなかつた」からではないだろうか。さらに言えば、学生は「教師の本気度」を感じ取っていることも確認できた。

学生は、教師がしっかりと自分たちが書いた作文に眼を通していか否かに気づいている。それは、(残念なことであるが)赤ペンでのチェックが全くない作文がないからである。もちろん、訂正箇所がそれほど多くない場合には「合格点として学生の名前の下に赤ペンで小さな○をつける」ことを伝えてあるのだが、ノーチェックの作文はほとんどない。そして、最終的にはその○の数と期末試験の点数で評価が決まることも予め説明している。

このような方法で、しばらくは間違った書き方がかなり改善されて文章力の向上が見られたが、学力低下は徐々に加速されてきて、問題が一段と深刻化した。そこで、それまでの方法に加えて学生の書いた文章の中から「適当と思われる文章」(間違いやすい文章で、訂正するのにちょうど良い文章)を選んでプリントを作って配付し、教室で訂正法を共有することにした。

もちろん、それまでに使用していた「正しい文章の書き方のヒント」のプリントも継続して、①

主語と述語のつながり方 ②敬体文と常体文の違いと文体の統一 ③読みやすい文章の長さ ④段落の付け方 ⑤送り仮名の付け方 ⑥話し言葉と書き言葉 ⑦原稿用紙の使い方などの基本的な事柄も確認している。

ところが、筆者が20年前に短大生の文章力の低下を問題にした頃に比べると、大学全入時代まっただ中における短大生の文章力の低下はすさまじいものとなってしまったと言わざるを得ない状況である。誤字や送り仮名の間違いは言うに及ばず、主語と述語が繋がらない文章が頻繁に登場し、話し言葉と書き言葉が同居する状態で、取り留めもなく100字から200字も句点を打たずに続けられる文章も珍しくなくなった。

ある時の授業で、「皆さんが幼稚園や保育園・こども園に先生として就職すると、保護者にお伝えすることを連絡帳に書くことがありますから、短時間でわかりやすい文章が書けるようにしっかり練習する必要があります」と話したところ、ビックリしたような顔をする学生が何人もいたのには筆者の方が驚いてしまった。ほとんどの学生は、自分の書いた文章を「第三者が読む」などといった状況は想定していなかったのである。

3. 学生が書いた文章の問題点

現在は「大学生の学力低下」がマスコミ等でも取り上げられているが、日常的に大学生（短大生）と接する機会がない人にとって、「日本語の文章が書けない大学生」がいることなど、想像もできないのではないだろうか。

そこで、1年生の実習日誌の中から、「おかしな文章」を紹介してその部分に下線を引き、〈 〉内に正しくない理由を示した。下線を引いていない部分にも間違った表現はあるが、煩わしくなるので省略した。

(1) 1年生の保育実習（観察）日誌から（学生の 実態に気づいてもらうために）

*紙芝居を読むときに上手に読めたらいいなと思います。 〈これは話し言葉です〉

*私が実習に向けてがんばりたいことは、子どもたちとたくさん関わることの他に2週間という短い期間でも自分なりにできることを毎日増やして、経験を積んでいきたいと思います。

〈主語と述語がつながっていない文です〉

*私が実習で経験したいことは、子どもがけんかをしてる時の対応の仕方や保育士に注目してほしい時、手遊び以外でどんなことをしてるのかなどをしたいです。

〈主語と述語がつながっていない文です〉

*そんなときはじゃんけんをして決めたり他のグループはこれで解決したけど、できるかとさまざまな案を出すことで子どもたちが自分で考えて解決できるのだとわかりました。

〈「たり（並列）」の使い方がおかしい文です〉

*今回はおやつの時間、お昼の時間に席につく位置を変えて違う子との関わりをしたら、昨日の関わりよりも大きく視野が見れることができ、園庭での遊びではたくさんの遊具とともに子どもたちと関わることができたと思っています。

〈「ら抜き言葉」が使われている文です〉

*今後の課題は、子どもたちとの会話を広げられるようにしたいと思っています。

〈主語と述語がつながっていない文です〉

*今日まで子どもたちと遊ぶ機会は多くありましたが、初日から子どもたちは今何をして遊

んでいるのかを見守り、そこに入るとい
ことはあまりしていなかったの
で、今では子どもたちとの活動
でも積極的に遊びに入ること
で子どもたちが何を考えて活動
しているのかをわかることが
できたと思っています。

〈長すぎる文です〉

* 高校の実習の時とは違った目線
で実習することができてすごく
勉強になったし、明日からの
実習にも生かせるらしいと思
いました。

〈話し言葉で書かれている文です〉

* 今まで実習で2歳から上が
ってきたけれど、やっぱり毎
回子どもの発達ってすごいな
と感心します。

〈話し言葉で書かれている文です〉

* 今日は久しぶりのすみれ組
さんだったけど、子どもたち
は覚えてくれていたみたい
で、朝保育室に入った時から
子どもたちから駆け寄って
きてくれてすごくうれし
かったです。

〈話し言葉で書かれた文です〉

* 手遊びや絵本を読み終えて
感じたことは、導入の仕方
をもっと学びたいと思
いました。

〈主語と述語が繋がっていない文です〉

* 私の実習目標はそれぞれの
年齢の子どもたちの発達
段階などを知れるようにし
っかり観察したりして毎日
を大切にしていきたいです。

〈ら抜きことば・タラちゃん
言葉〉〈主語と述語が
繋がっていない文です〉

* 短い時間でしたが2日間
で3歳児について前よりも
よく知れ、保育者としての
声かけ・対応など多くの
ことが学べたので、と
っても楽しいです。

〈ら抜きことば・タラちゃん
言葉・話し言葉

で書かれた文です〉

* 実習1日目を向かえて、初
めて子どもとちゃんと
向きあうのでとても不安
でしたが、子どもたちの
元気なパワーで楽しんで
実習することができました。

〈漢字間違いがあります・
話し言葉です〉

* 1日を通して感じたのは、
どこまで補助していいの
かがわからないことが多
く感じました。

〈主語と述語が繋がって
いない文です〉

* 5歳児さんになると、こ
んなにたくさんことができ
るんだと感じました。反
省点は、子どもたちが少
しケンカをしていたとき
にあまりうまく仲裁に入
れなかったのが反省点
だったかなと思っています。

〈話し言葉で書かれ主語
と述語が繋がっていない
文です〉

* 1日1日違うクラスに入
らせていただいて気づけ
たことは、同じ年齢の子
どもでもこんなにクラ
スの雰囲気が違うんだ
なと驚きました。

〈主語と述語が繋がって
いない文です〉

1年生が書いた保育実習日誌
(A4版)の「一日の活動の
振り返り」(13行分でマス
目はなく、罫線のみが引
かれている)と「11日間
の振り返り」(22行分)
の部分だけを4月になっ
て一通り眼を通した。そ
の結果、ほとんどすべての
学生の日誌に、何らかの
文章の書き方の問題があ
ることが確認された。

毎日の振り返りのテーマは
「今日の実習の振り返り
と今後の課題」で13行
分であるから、二つの
段落に分けて文章を書
いた方がクラス担任の
保育士にも読みやすい
文章になると思うが、
段落に分けられていた
(そして、書き始めが
一マス空けられていた)
日誌は、残念ながら1割
にも満たな

かった。

さらに、実習期間の全体(11日)を通しての「実習全体を振り返っての反省・気づき・今後の課題」の部分(22行分)も、その内容から「序論・本論・結論」の3段落もしくは「起・承・転・結」の4段落にすると指導をいただいた先生に読みやすい文面になると思うが、このページも段落を分けたり書き始めをひと文字下げたりしている学生は数えるほどしかいなかった。

しかも、上で紹介したように「話しことば」が非常に多く書かれていたため、夏期休業中に2度目の保育実習を行うまでの2年生の授業でしっかりと学習して、正しい文章の書き方を身につける必要があると考えた。

そこで、4月から5月に行われた「保育実習指導」の授業では、文章の書き方の基本をプリントして配付して説明したが、その後の文章を見る限り大きな変化は見られなかった。そのため、2年生の後期の「国語表現法Ⅱ」の授業でも同じプリントを再度配付した上で、「根比べのトレーニング」を開始することにしたのである。現在はその中間点を過ぎたあたりだが、これまでに見られなかった文章が新規に参入したので、それを中心に学生の現状を紹介してみよう。

(2) 新規参入①「文になっていない文」を平気で書いている学生

今回の考察をするに当たって、学生から提出されたレポートを改めて確認する中で、前年度まではあまり見られなかった文章の書き方が相当数見つかったので、次に紹介する。今までの経過を考えれば当然のことなのだが、それは①文章そのものが書けない学生の増加である。これは、小学校以来、文章が主語と述語という二つの要素から成り立っていることを認識しないまま高校を卒業していることである。これは、高校までの学校教育でも、そうした実態を踏まえた指導が徹底されずに通過して短大に入学したという事実を示してい

るのではないだろうか。

このこととも関連するが、もう一つは、文章を書くという行為が会話と同じ意識で行われているのではないだろうかということである。つまり、②心に浮かんだことを整理することなく、浮かぶに任せて取り留めもなく書いている(と思われる)文章が非常に多くみられることからそう考えるのである。具体的な例をあげるなら、一つの文章が接続詞(接続助詞)によってダラダラと続けられ、最も長い文章は文字数が200字を超える(400字詰め原稿用紙の半分が一つの文章ということ想像していただきたい)文章を書いている学生が30パーセント近くいたのである。ともかく、そうした事例を次に紹介してみよう。

*実習を通して、メモをとるときにしっかりと時間と保育者の言動と子どもの姿は単語でも見返したときにわかるようにとることが実習日誌に書くときも役に立ち、責任実習を行うときにスムーズにすることができるからです。(指定テーマ:実習を体験して後輩に伝えたいこと)

〈これが文章に思っているのでしょうか〉

*私が短大に入学して成長したことは、自分の子どもに対する考え方や接し方がとても変わりました。(指定テーマ:短大に入学して成長したこと)

〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*もう一つ成長したことは、友だちと関わる中で今までに揉めたりしましたが、そういった経験を通して、私は優しい心の広い人間になろうと思いました。(指定テーマ:短大に入学して成長したこと)

〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*二年生の後期を向かえての決意は、就職に向

けて専門的な知識を身につけるために勉学に励もうと思います。(指定テーマ：二年生の後期をむかえての決意)

〈主語と述語が繋がっていない文ですし漢字も間違っています〉

*そのためには、授業の話をよく聞く、わからないことは質問するなど、授業に積極的に参加するようにします。(指定テーマ：二年生の後期をむかえての決意)
〈「そのためには」という言葉には「～しなくてはなりません」と呼応するはずです〉

*実習を体験して後輩に伝えたいことは、責任実習はとても準備することが多く主活動の準備をするので寝る時間もなくとても忙しかったです。(指定テーマ：実習を体験して後輩に伝えたいこと)
〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*私が保育園を希望する理由は、私自身保育園の出身なので保育園に就職したいという気持ちが昔からありました。(指定テーマ：保育園を希望する理由)
〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*二年生の後期を迎えての決意は、来週に就職するのに向けて最後の準備期間になるため、座学での授業も遠隔での授業も気を抜かずに行っていきたいと思います。(指定テーマ：二年生の後期をむかえての決意)
〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*私が実習を体験して後輩に伝えたいことは、園の特色や子どもの成長発達について理解を深めて実習に望むことが大切だと思います。(指定テーマ：実習を終えて後輩に伝えたいこと)

〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*私が保育士の進路を希望する理由は、私自身の親が共働きで毎日お迎えが遅いほうでした。(指定テーマ：保育士の進路を希望する理由)

〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*敬語は心をつなぐ接着剤というのを読んで私が思ったことは、敬語を人に使うことで、お互いに良い気持ちになると思います。(指定テーマ：敬語について思うこと)

〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*私が今日の授業を受けて考えたことは、言葉は心の窓ということを知ることができました。(指定テーマ：授業を受けて考えたこと)
〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*私が少子化について思うことは、今の時代結婚がすべてではありません。(指定テーマ：少子化について思うこと)
〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*私が少子化について思うことは、今子どもがどんどん減ってきており、こども園に入園する子の数も少なくなっていると聞きました。(指定テーマ：少子化について思うこと)
〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*私が短大に入学して成長したことは、人前で発表することが得意になりました。(指定テーマ：短大に入学して成長したこと)
〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*私が実習を通して伝えたいことは、保育現場に行く前に教材を準備することが大切だと思います。(指定テーマ：実習を体験して後輩

に伝えたいこと)

〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*短大に入学して成長したことは、やっぱり子どもの発達について浅かった知識が少しでも大学で学んだことが実習でも役に立ちました。(指定テーマ：短大に入学して成長したこと)

〈主語と述語が繋がっていない文で、話し言葉で書かれている文です〉

ここに紹介したように、本年の二年生は主語と述語が繋がらない文章を書く学生の割合がこれまでに高く高いことが特筆される。小学校時代に学習したはずの、文章の骨格が主語と述語であることが認識できていないのではないだろうか。そして、本年度の授業では、さらに驚くべき文章を書く学生が急増していたのである。

(3) 新規参入② 取り留めもなく思いつくまま を書き綴る学生の出現と急増

*私が幼稚園の実習で責任実習を行ったときに、どうしてもどの活動にも友だちと同じように参加できない子どもがいました。その子どもと一緒に活動できるように、興味を持てるような声かけをするなど、私なりに対応しましたが、活動を止めるわけにもいかないし、活動を止めすぎると、他の子どもも集中力が切れて活動できなくなるので、私は活動を進めることを優先し、参加できなかった子どもは、担任の保育者が寄り添い、責任実習を無事終えました。(指定テーマ：実習を体験して後輩に伝えたいこと) 〈長すぎる文です〉

*2年生の後期を迎えて、昨年から新型コロナウイルスが流行り、ボランティアや実習活動がなくなってしまった中、2年の前期からはコロナ対策をしながらの実習が本格的に始ま

り、大学では学べないさまざまな内容の保育を学ぶことができ、子どもたちと実際に活動することで、思っていたよりも、どれだけ子どもたちへの配慮が必要なかがわかり、より保育者としての気持ちが高まりました。(指定テーマ：2年生の後期を迎えての決意)

〈長すぎる文です〉

*学生のうちは、先輩や先生など目上の人と話すより友人などの同等の立場の人と話す機会の方が多いため、敬語を使うこと自体少ないのですが、社会人になったら、上司や先輩、保護者と話すことが増えるため、相手のことを尊敬し大切に思う気持ちを相手に伝えるためにも正しい尊敬表現や敬語を身につけ、使えるようにしたいと思います。(指定テーマ：敬語について考えること)

〈長すぎる文です〉

*短大に入学する前は、1歳の時に歩けるようになる、ケンカをしていたらケンカをとめる、ピアノは上手に弾ければよいと思っていました。しかし、ケンカをしていたときには、すぐに止めないでようすを見ていたり、何でケンカをしたのか二人の前で話を聞く、ピアノは上手に弾くことは大切だけど、子どもの歌いやすいスピードで弾いたり、子どものようすを見ながら弾くことの大切さを学ぶことができ、実習では観察実習のときより、責任実習のときの方が、子どもとの関わり方が変わってきたので、成長したと感じました。(指定テーマ：短大に入学して成長したこと)

〈長すぎる文です〉

*短大に入学して成長したことは、まず、保育者への責任感をあまり理解できずにいましたが、授業を学んでいくうちにどういふところを気をつけていくか等を知ることができ、発

発達障害を持った子どもたちも一緒に活動する保育があるということを知り、発達障害はさまざまな種類があり、その子一人ひとりにどういった配慮・援助をしなければいけないことが学べ、私は発達障害について調べたり、教科書を使いどんな対処をしたらいいかを復習するようになりました。(指定テーマ：短大に入学して成長したこと)

〈長すぎる文です〉

*まず考えが大人になったという点ですが、入学する前は周りの事を考えるというよりも自分のことを先に考えることが多かったり、すぐ物事を悪く言うてしまうことが多かったのですが、短大に入学して実習だったりを経験してこの自分の自分の考え方がすごく変わり自分より周りのことを先に考えられるようになったり、将来を見据えて考えたり、物事を悪く言う前に考えたりすることができるようになり、良かったと思います。(短大に入学して成長したこと)

〈長すぎる文です〉

*短期大学に入学し座学や実習を通して、子どもに関わる専門的な知識や技術を身につけることは当たり前であり、保育者は子どもに対してだけの専門的な知識を持つだけでなく子育てで不安から虐待に繋がることもあるなどといった養育者が子どもに与える影響力は大きいことを理解したことで、保育者は、養育者について知る立場になって考え対応していく意識が必要であると感じるようになりました。(指定テーマ：短大に入学して成長したこと)

〈長すぎる文です〉

4. 四年制大学の学生（1年生）が書いた文章

筆者は、短大生の文章力がこの20年間で一段

と低下したと感じている。というよりも、そもそも、一部の学生が書いたものを除けば、文章になっていないと言った方がよいのかもしれない。

それでは、大学生の文章はどうであろうか。筆者はたまたま大学が開学した平成30年4月(2018年4月)から教育学部一年生の「日本語Ⅰ」の授業(必修)も担当してきた。一年生の授業であるため短大生との比較にも好都合なので、授業の課題として提出された文章の一部を紹介してみよう。

*第一回の授業を受けて、最初に思ったことは段落が一つもないことに気づきました。

〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*新型コロナの記事を読んで思ったことは、若者はコロナを舐めすぎていると思います。

〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*これらの行動や言動は、若者に限った話ではないと思うのですが、若者はSNS等を使いこなしていて、間違った情報を流す能力が高いため、コロナを舐める若者の増化に繋がります。

〈熟語や漢字の使い方が正しくない文です〉

*なぜなら、何でもかんでも聞かれたことに対してすべて答えていたら、その子の成長につながらないと思います。

〈「なぜなら」は「～だからです」と繋げなくてはなりません〉

*授業を聞いて、一番理解したことは、主語と述語をしっかりと直結するようにし、肯定文なのか否定文なのか、疑問文なのかを読んだ人がわかるような文章を書くことが大切だとわかりました。

〈主語と述語が繋がらない文です〉

*私が話し方について思うことは、流行語を使っていると、若く見えると思いました。

〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*新型コロナについての社説を読み、最近は高齢者より若者の感染が多くなっています。

〈「読み」の部分と「多くなっています」が繋がっていない文です〉

*私が責任実習に臨む決意は、保育者の立場を理解をし、子どもの成長のための保育・養育ができるような実習にしたいと思えます。

〈主語と述語が繋がっていない文です〉

*私は実際この記事を読んだときに、憤りを感じました。なぜなら、一般のご老人方ならば、指定の日の指定された時間に電話またはインターネットで予約を申し込まなければなりません。

〈「なぜなら」と書き始めたら「～だからです」と繋げなくてはならない文です〉

*私がこの「言葉の不思議な力」を読んで考えたことは、人との関わりを苦手とする人が多くなってきたのは、相手の気持ちを推し量りながら話すというトレーニングが不足しているという所から、インターネットの普及で面と向かったコミュニケーションの機会が少なくなり、コミュカの向上の優先順位が下がってきているもしかかもしれないと感じ、それを自覚して対策をとるなど改善したりしていかねければいけないと感じました。

〈主語と述語が繋がっていませんし、とにかく長すぎる文です〉

*今回、自分が書いた作文と資料「学生の文章によくある問題点の確認」を照らし合わせて、特に印象に残ったこととして、私としては基

本的によくできているというふうに感じていましたが、「文章の初めに「なので」を書かないや、一つの文章で二つも三つも物事を伝えようとしていたりなど、できていないところが多くあったので、そういった気づいた点から改善していくことで、よりよい文章が書けるようになっていきたいです。

〈長すぎる文です〉

*私は少子化を解消することは重要であると考えます。その理由は少子化だと経済的な面では年金などの現役世代の負担が増えてしまう面があり、社会的影響としては、子ども自身の健やかな成長への影響など問題点があるので、自分たちがこれから生きていくためにも若い世代の力がないと社会も成り立っていかないと感じました。

〈長すぎる文です〉

*私は、今回の「ことばにご用心」を読んでみて、言葉とは「言葉は心の窓」と言われており、単に自分が伝えたい事柄を表記する道具としての役目だけでなく、言葉を話す人の心や人間性も覗かせてくれる窓であるということと、「文は人なり」とも言われていて、文章を読めばそれを書いた人の考えがわかることは当然、文を書いた人の性格から考え方の傾向や能力までさまざまな情報が読み取れるということがわかりました。

〈長すぎる文です〉

*今コロナウイルスの影響で色々な事に制限がかかってしまっている中で、予測できないことに対して日頃から機転を利かせながら生活をするということが重要であると感じ、それはコロナウイルスに関わらず社会人には必要な事だと思っているので何か自分にとって不都合な事が起きても自分の最大限できることを尽

くしていこうと思いました。

〈長すぎる文です〉

* ワクチン予約の新聞を読んでみて今この世の中でワクチンは全国の市民に早く接種するという課題がある中で、近藤芳英副市長は、自分の立場を上げたいのか、会長に好かれたいのか分からないが市民を置き、会長を優先するというすごい迷惑な行為をしみんなから嫌われたり批判が来て当たり前なことをするこういう人が副市長をやっていることは、そこに住んでいる人達からしたらはじだとしか思えないと思うしこの世の中年をとっている人を他に市民みんな平等に見ることが大切だと思います。

〈長すぎる文です〉

5. 文章表現力の低下と保育者の資質（まとめに代えて）

今回も学生が書いた文章の「欠点探し」のような内容になってしまったが、筆者の思いは社会人になって困らないだけの文章力を身につけてほしいだけである。ただ、そのためには、学生自身の努力が不可欠である。お腹が空いたからと言って友人に「ご飯を食べてきて」と頼むわけにはいかない。自分の空腹が「自分で食べなくては、満たせない」ことはだれでも知っている。

ただ、「分かっているけれども面倒なことはしたくない」のが人間の本心であろう。近年は社会が便利になり、それに伴って「コツコツ努力する」ことは嫌がられるようになってしまった。手っ取り早く結果がほしいのである。けれども、なかなかその願いは満たされない。筆者が日本語の授業で毎週、課題文を提出してもらうのはそこに気づいてほしいからである。そして、これまでそのための方法を工夫してきた。

今年も新年度の授業を始める前に、「保育実習Ⅰ」（1年生の2月に実施）で学生が提出した実

習日誌を3月から4月にかけてチェックした。文章力に関する授業のためであるから、筆者が眼を通したのは、A4版の日誌の中の「実習に向けて」（10行分）「実習を半分終えて」（10行分）「今日の実習の振り返りと今後の課題」（13行分）「実習全体を振り返っての反省・気づき・今後の課題」（22行分）の部分である。マス目はないため、学生が自由に書いていて、文字の大きさと文字数は多少異なるものの、1行はおよそ30文字から40文字で書かれている。

そこに書かれている文章をチェックしたところ、誤字や当て字は言うまでもなく、注意力欠如や見直し不足と思われる表現が相当か所に見られた。日誌の提出者は200名ほどであるが、ほぼ全員から何らかのミスが見つかった。そのうえで、保育実習指導Ⅱと国語表現法Ⅱの授業を行った。その結果のごく一部を紹介したのが本小論である。さらに今回は初めて四大学生の文章も取り上げたが、短大生の問題点とそれほど大きな違いは見られなかった。

いずれにしても、学生の文章力の低下がかなり深刻であることは間違いない。こうした状況をどのように改善したらよいであろうか。大学に入学する前の教育も含めて、学生と教員の双方が地道な努力を重ねていかないと問題の解決は難しいであろう。高大接続などといったスローガンを掲げるだけでなく、幼少期を含めた小学校から高等学校に至る教育の在り方も含めた「学び方」「指導のしかた」を総合的に見直す必要があるとの思いを強くする。

しかも、「国語はすべての基本」と言われてきた。文章力の低下は、ただ文章の書き方に止まらない大きな問題を含んでいる。このままでは、一部の大学や短大を除いて、大学教育（短大教育）そのものが成り立たなくなる（崩壊してしまう）ことは間違いない。

このような筆者の考えを裏付けるのは、榎本博明（MP人間科学研究所代表）の指摘である。榎

本は『教育現場は困ってる』（平凡社新書：2020年6月）で「楽をして学ぶことと学ぶことが楽しいということは異なる」と述べて、次のような興味深い見解を示している。少し長くなるが非常に重要な事柄なので全文を紹介しておこう。^(註3)

勉強でも、スポーツでも、芸術でも、仕事でも、何でもそうだが、ある程度できるようになって「楽しい」と感じられるようになるには、単純な訓練や辛い練習を繰り返すことで基本を習得し、基礎的な能力を身につける必要がある。

そのために大切になるのが非認知能力である。2000年にノーベル賞を受賞した経済学者ジェームズ・ヘックマンは、人生のどの時点において、教育に金をかけるのが効果的であるかを探る研究を行っている。そして、小学校に入る前の教育がその後の人生を大きく左右することを実証してみせた。しかも、就学前教育でとくに重要なのは、IQのような認知能力、いわゆる知的な能力を高めることよりも、忍耐力や感情コントロール力、共感性、やる気などの非認知能力を高めることだということを見出した。

非認知能力というのは、自分を動機づける（自分をやる気にさせる）力、長期的な視野で行動する力、自分を信頼する力、自分の感情をコントロールする力など、知的能力とは異なる能力を指す。

その核となる要素が自己コントロール力である。最新の心理学研究でも、自己コントロール力が人生の成功を大きく左右することが協調されている。

このような指摘は、まさに筆者が接している短大生（或いは多くの短大生や大学生）の学習態度（「わからない」「できない」と言って、すぐに投げ出してしまう傾向が極めて強いこと）そのものを指摘しているように感じたのである。

そして、このような短大生の学習態度の原因が幼児期の「育てられ方（生活環境）」にあると考える筆者は、折に触れて「早期の知識教育に走る」

のではなく「遊びを通して」という幼児教育の基本に立ち返るべきであると主張してきたのだが、この問題に関しても榎本は次のように指摘している。

このような自己コントロール力は、まさに日本の子育てや教育において伝統的に重視されてきたものである。日本では、教育でも子育てでもアメリカ流を取り入れようとする傾向が強い。だが、最近のアメリカの研究では、むしろ日本の教育や子育てで重視されてきたもの、つまり忍耐力や克己心といった非認知能力の大切さが協調され始めているのである。

このところの日本の教育では、アメリカの真似をして自己主張のスキルが重視されているが、その結果、自己コントロール力の乏しい子どもや若者が生み出されていると考えられる。

筆者が関わってきた保育者養成に関しても、このままでは保育者の質の低下が避けられず、乳幼児の生命の保護と望ましい成長や発達の援助ができなくなってしまうのではないだろうか。すでにその徴候はさまざまな面に見られる。^(註4) 保育科で長く学生の実態に接してきた立場を踏まえて言うなら、「本当の意味で〈遊びを基本とした幼児教育（保育）〉の本来の姿を取り戻す必要があり、それが質の高い保育者を養成することにもつながると考えている。

その理由は、集中力・持続力・問題意識等、現在の多くの短大生（大学生）に不足している「人として生きる力」を育む土台は、幼児期の過ごし方に左右されるからである。その一方で「国語はすべての基本」と言われてきた。これまで見てきたように、文章力の低下は、ただ文章の書き方に止まらない大きな問題を含んでいることを指摘してひとまず本稿を終えることにする。

【註】

- (1) 佐藤達全「保育科学生の文章表現力について」（『育英短期大学研究紀要』第19号 2002年3月）

(2) 筆者が「学生の文章力の低下」についての口頭発表を行ったのは2006年が最初であったが、その頃を思い返すと養成校の先生方の反応は思ったほどではなく、文章力低下が筆者が関係する短大だけの問題なのかとさえ感じていた。ところが、連続して7回の発表を行ううちに状況が大きく変化した。会場での意見交換が増えるだけでなく、(喜べることはないが)筆者の発表や研究紀要が紹介・引用されるようになったのである。そこで、今後の研究の参考に、筆者の発表を導入にしたり引用・紹介したりしている論文等を以下に紹介しておく。

上村 晶「幼稚園実習における学生の学びに関する一考察」(『近畿大学豊岡短期大学論集』第5号 2008年3月)

松崎史周「保育者養成短期大学における国語力育成のあり方」(『清泉女学院短期大学研究紀要』第31号 2013年3月)

中平絢子・馬場訓子・高橋敏之「保育所保育における保育士の資質の問題点と課題」(『岡山大学教師教育開発センター紀要』第3号別冊 2013年3月)

松田侑子・濱田祥子・設楽紗英子「保育慶学生における大学適応一進学動機、キャリア探索の観点から」(『弘前大学教育学部紀要』第112号 2014年10月)

名定慎也・今井慶宗「短期大学の教育課程における国語表現科目の研究一介護福祉士養成課程の福祉教育を通して」(『関西女子短期大学研究紀要』2017年3月)

中野真樹・塚越亜希子「幼稚園教育実習における『教育実習指導』と日本語表現科目との教科横断の必要性」(『関東短期大学紀要』第59集 2017年3月)

菊田尚人「保育者養成課程における『日本語表現』での振り返り活動について一学期末レポートの記述に着目して」(埼玉純真短期大学研究論文集)第10号 2017年3月)

浅井拓久也・浅井かおり「保育者の専門性向上につながる学びに関する一考察」(『東京未来大学保育・教職センター紀要』特別号 2017年3月)

皆川 晶「短期大学生による話し言葉と書き言葉の認識と実態について」(『近畿大学九州短期大学

研究紀要』第20号 2017年3月)

西川友理「保育士・幼稚園教諭養成校では文章表現系の科目で何を教えているのか」(『西山学苑研究紀要』第12号 2017年3月)

赤間公子「保育者を目指す学生の文章作成力について」(『信州豊南短期大学紀要』35号 2018年3月)

山下由美子・長谷川哲生・山川広人・小松川浩「話しことばチェッカーの開発と実証評価」(JSiSEリサーチレポート vol.34, no5 2020年1月)

増田 翼「保育職への接続・適応に関する先行研究の系譜と課題(1)」(『仁愛女子短期大学研究紀要』第52号 2020年3月)

吉江幸子「保育実習日誌の書き方に関する考察」(『星槎道都大学研究紀要』創刊号 2020年3月)

(3) 榎本博明『教育現場は困ってる』(平凡社新書 2020年6月)

(4) 事例1「保育の質が劣化している」(『女性セブン』2018年10月25日号)

事例2「散歩中の保育園児(置き去り)4年間で94件 東京都が注意喚起」(朝日新聞 DIGITAL2022年2月3日)

保育士が園児を散歩先の公園などに置いたまま、気づかずに戻ってきてしまう「置き去り」が2017年~2020年度の4年間で94件も発生して増加傾向だという。全国規模での調査はないので実態は不明だが、これは既に文章力の低下で指摘した(注意力低下)が原因ではないだろうか)

保育者の資質低下はさまざまなところで指摘されているが、その背景には急激に増加した待機児童解消のために保育者が不足していることに加えて、他業種に比べて給与の低いことが指摘されている。このことに関しては筆者も以前に触れたことがあるので参照してほしい。

佐藤達全「保育士を取り巻く労働環境と保育士の資質について一3Kと言われかねない労働環境と希望者減少の中で」(『育英教育論集』第7号 2020年9月)

(2021年1月24日受理)